



星の王子さま

Seeing with the Heart

永田円了

『星の王子さま』は、不思議な本である。若い時に読むと童話として心に残り、中年になって読むと、人間関係の本として響き、老年になって読むと、別れや愛、そして人生そのものについて語りかけてくるように感じられる作品である。

老いてもなお、心の中の王子さまを失わない

年を重ねると、人は多くのものを手放していく。若さも、体力も、役割も、かつての肩書きも、少しずつ遠ざかっていく。子供たちは独立し、職場を離れ、気が付けば人生の夕暮れの中を静かに歩いている自分に出会う。しかし、本当にそうだろうか。失われていくものばかりなのだろうか。

『星の王子さま』を書いたサン＝テグジュペリは、こんな言葉を残した。

「**本当に大切なものは、目には見えない**」 私たちは長い間、目に見えるものを追いかけて生きてきた。地位、収入、業績、人からの評価。忙しさの中で、それらが人生の価値を決めるものだと思い込んできた。しかし、不思議なことに、人生の後半になって振り返ると、本当に心に残っているものは、まるで違う。夕暮れの帰り道で交わした家族との会話。何十年前に教え子からもらった一通の手紙。今はもう会うことのできない人との思い出。どれも、目には見えないものばかりである。



キツネは王子さまに言った。「君が午後四時に来るなら、ぼくは三時から幸せになる。」人と人との関係とは、効率ではない。時間をかけること。待つこと。心を開くこと。そして、お互いにかげがない存在になっていくこと。便利になった現代は、人を簡単につなぐことができるようになった。しかし、つながることと、その人と関わっていくことは違う。本当の絆は、時間の中で育まれる。だから王子さまは、たった一輪のバラを愛した。世界中におなじ花があったとしても、そのバラに水をやり、その声に耳を傾け、そのわがままに悩み、その沈黙を受け入れてきた時間が、そのバラをかがえのない存在にしたのである。

人生もまた、同じなのかもしれない。私たちは多くの出会いをし、多くの別れを経験する。親しかった人を見送り、友を失い、自分自身もまた、いつか旅立つ日を迎える。王子さまは最後に、蛇に身を委ねて星へ帰っていく。悲しい別れだった。けれども、それは終わりではなかった。キツネの言葉が残されている。「夜、空を見上げたら、君には星たちがみんな笑っているようにみえるだろう。」人は去っても、その人の面影は去らない。姿が消えても、共に生きた時間は消えない。だから人生の終わりに近づくほど、人は目でなく、心で見ることを学ぶ。

老いるとは、失うことではない。むしろ、長い旅の果てに、自分の中に住んでいた小さな王子さまと、もう一度出会い直すことなのかもしれない。驚くことを忘れず、美しい夕焼けに立ち止まり、人の痛みを耳を澄まし、「なぜ？」と問い続ける心を失わない。それこそが、歳を重ねてもなお若く生きる、ということなのだろう。

夜が深くなるほど、星は近くなる。人生の夕暮れは、終わりの時ではなく、それは、目に見えるものを追いかけてきた長い旅路の末、ようやく心で見ることを学び始める、美しい時間なのかもしれない。もし夜空のどこかで、あの小さな王子さまが笑っているなら、私たちもまた、静かに微笑みながらこう答えたい。

「ありがとう。大切なものは、始めからずっとここにあった」と

<事例>

『星の王子さま』1943年発行、サン＝テグジュペリ作、
『The Little Prince』ミュージカル映画、1974年
野澤友宏氏(53)、電通の最前線にいたはずが、
“他人軸症候群”に陥っていた
元NHKアナウンサー・内多勝康氏、NHKを退職し福祉の道へ
映画『キッズ・リターン』1996年北野武監督作品
歌・竹内まりや「いのちの歌」

